第二回リレー小説「梅雨」白組四番手

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　鱈鱈

　砂丘のすぐ近くにあるコンビニで買ってきたカードゲームのパックを五つ携えて、「２０１」と書かれた病室の扉をノックする。はい、と物静かな声で返事をしたのは佐原だった。中に入ると彼はいたって元気そうで（左腕はつながっていた。厳重に包帯が巻かれていたけれども）、私たちの姿を確認した後、読みかけていた本を脇に置いた。

　四人は再会を喜び、荷物の中から各々の手土産を取り出して彼に手渡す。彼は特にはしゃぎだすこともなく、あまり濃すぎない笑顔で感謝を示す。

――大分抉られたけれども、骨には達していなかったようだし、三隅さんが冷静に対処してくれたおかげで、特に跡が残ることもなく綺麗に治るそうだよ。

　佐原はどこか他人事みたいにそう教えてくれた。私は私で、大したことはしてませんよ、と謙遜したけれども、それに対して彼は、君が真っ先に血を拭き取ってくれたおかげでお気に入りのカードが駄目にならずに済んだんだ、と冗談まで飛ばしてきて、部屋全体が笑いに包まれた。

　佐原が襲われた後、彼はすぐに近くの病院に搬送された。彼の親戚が鳥取県に住んでいたこともあって、茨城の病院に行かずにこちらに留まっていたのだ。彼以外の三人は、鳥取県警で一通りの事情聴取を受けたのちに、刑事の運転する自家用車に乗せてもらって茨城まで帰った。通り魔が捕まり登校禁止が解除されるまではこちらにいるつもりだ、との連絡を彼から受けたのはそれからたった二日後のことだ。

彼と鳥取旅行を共にした三人が同時に彼からのメールを受信したすぐ後に、私は十和田さんに、週末に先輩の見舞いに行こう、と提案した。綾瀬のことは苦手だったからできれば二人で行きたかったけれども、彼女は、綾瀬君も連れていこうよ、と言ったから仕方なく彼も連れていくことにし、新幹線ではなく今度は彼の車で鳥取までやってきた。

――津理恵ちゃん、津理恵ちゃん。

　十和田さんが私の肩を叩き、ふと我に返った。魂が抜けてたよ、と言って彼女は私の目を覗きこんだ。

この日は雲一つなく晴れていた。病室の窓から差し込んだ陽光が、いつの間にか開封されていたらしいカードの中の一枚に反射して眩しい。モンスターの絵柄が七色の、その上に重なる格子状の模様が金色の光を放つ。片手が使えない佐原が、綾瀬にでも開封を頼んだのだろう。その綾瀬はというと、窓際で煙草をふかしている。気のせいかもしれないけれども、事件があってから彼はほんの少しだけ大人しくなっていた。

――何か思うところがあるのじゃないかしら。

――あなたにも教えてくれないの？

　十和田さんはかぶりを振った。みみずのこと、と私が訊くと、そこらを満たしている空気がわずかに淀んだような気がした。避けて通ることのできない話題だけれども、みんなの心の準備ができるのを待った方が良かったかな、とも思わずにはいられない。

彼は行きの車の中で、あの時遠くから巨大なみみずの姿を見たんだ、と言ったのだ。そいつは、佐原先輩の左肩を抉って、それから地中へと引き返した、と。

――それじゃあ見てないのは私だけか。

　一人疎外を感じたらしい彼女が肩を落とした。

――綾瀬君は教えてくれなかったの？

――見間違いだと思ったんでしょう。

――俺も見ていないよ。後ろから襲われて、すぐに気を失ってしまったからね。

　佐原が彼女を見て言った。別に彼女を慰めるつもりで言ったのではないことは、彼の性格と声の調子ですぐに分かった。本当のことをそのまま口にしただけだ。

――あの後三隅さんはどうしたんだろう？

　今度は私の方に尋ねた。私は…倒れている佐原を見下ろす通り魔に向かって、今日の所はひとまずお引き取りください、とお願いしただけだ。そしたら本当に帰って行った。どこに？ 佐原の介抱に夢中で通り魔の行き先なんて見ていない。綾瀬の言うとおり、本当に土の中に帰って行ったのだろう。通り魔は真っ黒いレインコートを着ていたし、人の姿をしていたから綾瀬の言っていることは百パーセント正しいわけではない。だが、黒いレインコートに返り血を浴びたそいつが、滑らかに、もにょもにょと身体をくねらせている姿はまさにみみずだった。栄養分が豊富で湿った土の中にしかいないと思っていたが、鳥取砂丘のような、果てしなく貧しくて乾ききった地の中にも案外いるものなのだなあ、と、苦しそうに悶えている佐原をよそに感心していたのだけど、それだけは誰にも言うことなく胸の中にそっとしまっておいている。とにかく、彼らはどこにだって住んでいる。無慈悲に降り続く雨が住処を追いやったから、彼らは人目に触れる場所に出てきているのだ。そんな彼らがなぜ地上の人々を傷つけて回っているのかについては、全く見当がつかなかったが、梅雨の間中みみずのことばかり考えてきたがゆえに、みみず（的な何かの）専門家を心密かに自負している私は、とりあえず色々な可能性を考察、いや、考察というよりは、ただ取り留めもなく空想してみた。例えば、彼らはある日突然酸素の欠乏を感じ、それを求めて上へ上へと登って行く。でも、いざ無尽蔵に酸素が生み出されるはずの地上に出てみても、そこに彼らの居場所などなかった。それで地上に絶望した彼らは周囲の人間に怒りをぶつけている、といったところか。あるいは、彼らにとっての地上は実はこんな所なんかではなくて、もっと遠い遠い場所、少なくとも生きている間には到底辿り着くことのできないような場所だったりして、それを悟ったみみず達は発狂せずにはいられなかったのだとか。そんな事を思っているうちに、酸素って何だ、地上って何だ、という疑問がゆらゆらと浮かんできて中空に留まった。

　私は佐原に、通り魔に対してどんな対応を取ったのか、とかそいつはどんな姿形をしていたのか、といったことをありのままに伝えたけれど、それについて考えていることを全部語ったりはしなかった。

――見ろよ、また降ってきたぜ。

　呟いたのは、さっきから窓の外を眺めている綾瀬だった。十和田さんが彼の隣に並んで身を乗り出した。

――ちょっと前までは晴れていたのに。

　仲好さそうに並ぶ二人を見ていると、なんだか佐原と共に取り残されたような気になってきた。

――私たちに晴天は訪れるんでしょうかねえ。

　と試しに呟いてみる。そしたら、それに応答してきたのは佐原ではなくて、十和田さんだった。

――いつか晴れるよ。それまで、生きよう。

　周囲を気遣った発言ではあったが、それがみんなの心を明るくしたような気配はなかった。しかし、そんな空気に異質な石をひとつ、投げ入れたのは隣にいた綾瀬だった。

――いいだろ、雨でも。俺は雨、好きだけどね。

　ふうん、なかなか面白いことをいう奴だね、と佐原が私だけに聞こえるように囁いた。

――三隅さんは雨、嫌いなのだっけ。

――息苦しいですから。佐原先輩もお嫌いですか？

――最近、よく分からないのさ。昔は嫌いだった。それに、みんなで旅行した時にあんなことがあったものだから、ますます雨が嫌いになるんじゃないかと、手術の時に思ったものだが、予想に反してそうはならなかった。複雑な気持ちさ。

　突然綾瀬が、外を散歩しに行こう、などと言いだした。十和田さんは、あなた正気なの、と相手にする様子もない。でも彼は冗談のつもりで言ったのではないようだ。財布をポケットにしまい、リュックサックからちゃちな折り畳み傘を取り出した。歩いて数分のところに砂丘はある。彼が本気なのが分かると、彼女もいそいそと外出の準備を始めた。

　二人が外に出てしまうと、室内にこだまする些細な音が、より濃厚な存在感をもって私たちに語りかけてきた。軒から落ちる大粒の滴が、硬くて軽い平板に当たって砕け、しとしとと小気味の良い音をいくつも立てる。外を見ても雨なんて見えないけれども、それを聞いて初めて、外では雨が降っているのだと知る。

間もなく窓の下を二人が駈けていくのが見えた。あの二人、通り魔に襲われなければいいですけど、と私は懸念したが、佐原はさほど心配している様子はない。小さくなっていく二人の背中と、二人が作り出していく水溜まりの波紋を眺めながら、二人にはどうか無事でいてほしい、と願った。――あれっ？ いつからか、綾瀬のことがそれほど不快に思わなくなっていた。なぜなのだろう？ 私だけではない、四人の間にあった微妙な嫌悪は、午後になるといつの間にか消えてなくなる霧のように姿を消してしまい、代わりに友情の可能性みたいなものがそこに仄めかされているような気がした。だがそれは脆く壊れやすい。盲目のみみずが地から這い上がってくるみたいに、再び疑心が湧き上がってくるということがこれから起こらないなどとどうして言えるのだろう。

――襲われた時だがね、意識が遠のく瞬間、実はあの二人のどちらかが犯人なんじゃないかと疑ったのさ。本当に一瞬だけど。

　突然佐原がそう告白した。大学近辺に出没する通り魔が、数百キロ離れたこの鳥取に現われたとなると、それはある意味当然の判断と言える。神でない限り、同一の人物が二か所に存在することはない。

――だけどさっき電話をもらった時、それは間違いなんだと悟った。雨に対して、今まで感じたことのない思いを抱いたのもその時からだろう。

――電話って、綾瀬君からの？ 何を話していたんですか。

――真っ黒な通り魔の背中だけ見えたのだそうだ。綾瀬君にとって、彼の後姿はどことなく寂しそうに映ったらしい。それだけのことなんだけど、彼には意外と感傷的なところがあるんだなあ、って思って、それからしばらく俺はその驚きの余韻に浸っていたね。

　そう言うと、佐原はしばらく黙りこんだ。驚きの余韻に浸っているのだ。それから何かに思い当たったのか、唐突に口を開いた。

――十和田さんから聞いたんだけど、鳥取砂丘に行きたいと最初に言い出したのは君らしいね。どうしてこんな遠いところに？

――乾いた空気を思い切り吸いたかっただけです。

――ははは。残念だったね、この時期は日本中が湿気に包まれている。

　でも、と彼は言う。

――雨の砂丘も楽しいものだよ。

　そうかもしれませんね。でも、私にはまだわかりません。それから重くも軽くもない沈黙が流れ、私たちは窓の外を十分ばかり眺め続ける。雨は、一瞬止んだかと思うと突風と共に大粒の雨滴を窓に打ちつけて、という流れを何度も繰り返した。強まったり弱まったりしながら、自分にとって一番心地の良い姿勢を模索しているようにも見える。

沈黙に耐えられなくなって、カードゲームやりませんかと私が誘うと、彼は、いや、俺らも散歩に出よう、と提案してきた。